

コロナ禍がもたらしたムラ意識の変容と心理的影響

この論文では、コロナ禍がもたらしたムラ意識の変容と心理的影響について述べている。2020年初頭に新型コロナウイルスと呼ばれる新しいウイルスが世界中でまん延した。このことで世界中の経済や日常生活に大きな変化が起き、大混乱に陥った。

日本経済新聞社のデータでは、日本は世界に比べ感染者数、死亡者数が共に低くなっている。世界に比べ感染対策が厳しいのかということそうではなく、政府からはあくまで要請であり強制力はない。それなのにも関わらず、感染拡大を抑えることができているのである。また、コロナ禍の日本において、感染者や医療従事者への差別的な発言や行動も問題視された。これら二つの現象は、日本に昔から根付くムラ意識が関係しているのではないかと仮定した。

日本は社会構造的にムラ社会が作られやすく、同調圧力を強く受けやすい。子どもの頃から学校や部活、グループなどのムラに所属し、他人に迷惑をかけてはいけないという圧力を受けて育っている。このような圧力には良い面、悪い面が存在し、このコロナ禍においてはどちらも発揮されたといえるだろう。良い面は、強制力がなくても自粛を心がけ感染拡大を抑えることができたこと、悪い面としてはコロナ差別が挙げられる。

朝日新聞ではコロナ差別に対する国民調査を行った。その結果、多くの人がコロナに感染した場合、周囲の目、つまり世間の目が気になるという結果になった。また、筆者自身が行った調査では、都心と地方のコロナに対する意識の差も明らかになった。感染者が多い都心部では、感染に対するハードルが低くなっており、周囲の目を敏感に感じている様子はいかたがえなかった。しかし、感染者が少ない地方では、感染したという情報が素早く周り、差別意識が強くなっているように感じられた。自分の所属するムラの安全が壊される、その原因は排除したい、感染を広げるなんて迷惑だ、というような目に見えない恐怖から差別行動につながっているのだろう。

また、コロナ禍で起こった差別行動の原因として、承認欲求によるものも考えられる。SNSが発達した現代では、簡単に自分の意見を発信することができる。その意見が肯定されるとより強い承認欲求が芽生え、目に見える形での攻撃行動にうつる。自分の正義が肯定してもらえる場所でより多くの人に認めてもらうことで、世界がそこだけになり攻撃行動へのハードルが低くなっているのではないだろうか。

このコロナ禍であらわになったネガティブサイド、そこに問題意識を持ち、人々が日ごろの小さな行動からでも変えていく意識を持つことができれば、簡単なことではないがポジティブ・サイド、メリットがデメリットを上回っていくのではないだろうか。日本社会にとって、世間やムラ意識が良い影響をもたらす存在になることを願う。